

福祉のイメージ転換と主体性の 醸成におけるメカニズムについて

—「福祉」と「美容」融合イベント参加者に対する追跡調査を通しての検討—

熊谷大輔[※]

要旨：

少子高齢化・人口減少社会において福祉への需要は高まっているものの、福祉に対するイメージは都市・地方問わず悪化する傾向にある。しかもその傾向は、今後、福祉を担うことが期待される若年層を中心に広がりを見せている。

そこで本論文では、福祉をめぐる「場づくり」を目指すF団体による、福祉と美容を組合せ、参加者どうしの対話を促すイベントへの参加者のうち3名に実施したインタビュー調査をもとに、福祉に対するイメージの転換と主体性が醸成される過程を検証した。

まず、当初は世間が抱く一般的な福祉に対するネガティブなイメージの転換に注目していたが、それぞれの参加者が想定する福祉が「従事するもの」か「利用するもの」かにより、イメージが転換する構造に違いが見られた。このうち「従事する福祉」である場合、たしかに世間のネガティブなイメージの内面化が観察されたが、それは福祉に従事すること自体によってもたらされており、単に世間のイメージが問題であるとは言えなかった。他方、「利用する福祉」である場合には、ネガティブなイメージから進んでタブー意識があったりそもそも無関心であったりした。

次に、異なるイメージの転換だけでなく主体性の醸成の気づきがあり、しかもそれらが互いに不可分に関連していると考えられた。すなわち「従事する福祉」が想定されていた場合、「相互扶助」や「利他」といった福祉の本来的な魅力の再確認がイメージの転換と主体性の醸成をともに促していた。これに対して、「利用する福祉」が想定されていた場合は、参加者の「自己体験化」が双方の過程で鍵を握っていた。

以上を踏まえると、福祉に対するイメージ転換と主体性醸成をともに目指す今後の地域活動においては、福祉が「支え合い」よりも「利用し利用される」ものになっている現実を踏まえ、より「利用者」目線に立った戦略が必要だと言えよう。

キーワード：福祉イメージ、主体性の醸成、自己体験化、利他意識

[※] くまがいだいすけ 弘前大学大学院地域社会研究科地域文化研究講座
qqa824d9@bridge.ocn.ne.jp

Conversion of the Image of and the Interest in Social Welfare: A case of the program reminding the common ground between social welfare and beauty

Daisuke KUMAGAI

Abstract :

Despite of increasing demand for welfare in respond to the aging and decline of population in contemporary Japan, the image of social welfare tends to deteriorate regardless of area. Moreover its tendency spreads widely mainly by the youngers expected socially but unwilling themselves to be engaged in the social welfare work in the future.

In this article, we explore the process of the conversion of their image of and their interest in social welfare through the interviews of the participants of the program that was planned to remind of them the common ground between social welfare and beauty.

First, we notice the two different images of social welfare “welfare engaged” and “welfare used”. Following this distinction, we can trace the two different structure of the conversion of the image of social welfare.

In the case of “welfare engaged”, we can observe the internalization of the public negative image of the social welfare, but this internalization was engendered not only by the public image but also their engaging in social welfare work itself. On the other hand, in the case of “welfare used”, we should call the image of social welfare of the interviewee not “negative” but “taboo” or “indifference”.

Secondly, we can point out the different “awakening” of the interest in social welfare and the close linkage between of the conversion of their image and the “awakening” of their interest in social welfare. In the case of “welfare engaged”, both the conversion of their image and “awakening” of their interest were engendered through the reconfirmation of the aspect as “mutual aid” and “altruism” of social welfare. On the other hand, in the case of “welfare used”, they were evoked by the understanding of social welfare as his own experience.

In conclusion, we also need to plan the new program based on the view of user of social welfare for the local action actualizing the conversion of the image and interest in social welfare.

Keywords: image conversion, awakening of interest, altruism, experience.

I はじめに

1 福祉社会への課題

我が国では現在、少子高齢化だけでなく総人口の減少も進み、様々な機関がその対策に取り組み始めている。そこでは福祉への需要が必然的に高まる一方で若年層の福祉に対するイメージの向上が喫緊の課題と考えられている。例えば堀田ら（2009）¹⁾が、従事者自身がポジティブな福祉イメージを抱くことの重要性を指摘する一方、山田（2014）²⁾は、福祉専門職を目指す大学生について、福祉の仕事に対し「厳しい」などネガティブなイメージを持つ者も存在し、それゆえ社会福祉学部の福祉職への希望者が減少しているとしている。

一方で厚生労働省は、市町村や都道府県による地域の「自主性」や「主体性」に基づくシステムを

構築する必要性を指摘し、2025年を目途に高齢者の尊厳の保持と自立生活の支援を目的に地域の包括的な支援・サービス提供体制（地域包括ケアシステム）を推進している。さらにJA全中は第26回JA全国大会で採択する大会議案の中で、JAが地域の中核として行政や地域の産学官・NPOと協力しながら「JA版地域包括ケアシステムの構築」を目指すとしており、地域包括ケアシステムの構築へ向けた流れは一般化されつつある。

これら地域の「自主性」や「主体性」に基づくシステム構築は構築されて終わるのではなく、構築された後の「持続性」や「継続性」についても大きな論点となっており、そこでは急速に支援の担い手が減少する2030年以降の地域の在り方についても言及されている³⁾。この論点に対し、藤松(2012)⁴⁾は持続可能な地域づくりには住民一人一人が地域の課題とその解決策を考え、実際に課題解決に向けた取り組みを行うことが重要であるとしている。したがって、「地域包括ケアシステム」の構築という観点からは若年層の福祉に対するイメージの向上だけでなく、それを踏まえた福祉の担い手としての主体形成もまた求められる。

これまでも主体形成に関しては先行研究において既に多くの検証がなされており、地域における主体形成の必要性とともに、その課題についても既にいくつかの指摘がされている。例えば、小谷ら(2014年)⁵⁾は地域参画の主体性の課題として、地域参画への属性に関わる阻害要因を解消する施策と共に、地域集団・社会団体活動への場や機会を豊富化し、そこでの役割付与やその活動経験を通して、問題の共有・共感と地域感情を高め、地域参画への主体要件を発達させていくことであるとしている。

しかし、その多くは主として理論研究が中心であり、実際にどのようなプロセスを経て、意識変化が生じ、その後、生じた意識変化が主体形成にどのような影響を及ぼすのかという実践的研究は多くは見られず、実証的な研究は未だ不十分であると言えよう。

2 問題の所在

このうち福祉に対するイメージの向上という論点に対し、上田(1996)⁶⁾は、日本人は他者志向性、特に「世間」志向性が強いとしている。この論にしたがえば、福祉に対するイメージの向上をめぐることは、「世間」が福祉に抱くネガティブなイメージの影響を福祉の担い手から、いかにして拭い去るかが課題であると言えよう。

また、集団におけるネガティブな感情表出の関係性について分析した藤井ら(2010)⁷⁾によれば、関係流動性の低い環境に置かれている者はそうでない者に比べ、他者に対するネガティブ感情を表出しやすいとし、決定行動を行う際に影響を与えるものとして、自分では容易に変えることのできない集団との関係を挙げている。

これに対し、福祉の担い手としての主体形成という論点に関しては、寺田ら(2014)⁸⁾が鯨岡(2006)⁹⁾などの議論を踏まえ、子育て支援に即して言えば「子どものいのちをまもりたい」という自己充実主体性と「地域の親や子どもと共にありたい」という繋合希求主体性とが相乗的に成熟する過程を指摘している。ここでの「自己充実」や「繋合希求」は福祉から本来的、本質的に与えられる心的な状態である。しかし、そのように所与とされるがゆえに、福祉イメージが悪化している主体において、どのようにしてそれらを引き出し促すことができるかは明らかになっていない。

そうした主体性醸成の要因について野口(1968)は、主体性の基礎にある「自発性」は、個人それぞれの状況や時点における感覚が無差別に肯定されることで促される¹⁰⁾と指摘する。これに対し、林(2011)は、主体性は個人としてのありようだけではなく、他者との関係で促される¹¹⁾と指摘している。さらに、谷口(2004)は、主体的な力量が地域生活者としての「自覚」「覚醒」を通じて形成される¹²⁾としている。したがって、主体性の醸成においては自己充足(野口のいう「無差別な肯定」)や繋合(林のいう「他者との関係」)がどのように「自覚」「覚醒」されるか、つまり「気づき」のポイントに着目することが重要となる。

以上の先行研究を踏まえ、まず福祉イメージの転換という論点に関しては、(1)世間のイメージの影響、(2)福祉従事者が属する集団（職場）の効果を検証することが必要である。そこで本研究では、(1)世間におけるイメージが対照的だと思われる福祉と美容を組み合わせたイベントに参加したとき、参加者に福祉に対するイメージ変化が現れるかどうか、(2)参加者のうち福祉従事者と非福祉従事者とでその変化に違いがあるかどうかを検証し、それら変化の過程を当事者の語りにもとづいて考察する。福祉と美容とは、整髪や化粧などが本来は福祉でも必要とされているにもかかわらず、公的福祉サービスの内容に含まれていない（谷口（2001）¹³⁾、原ら（2003）¹⁴⁾）ように、世間的には互いに相容れないものだと考えられている。本研究は、そのように対極・対照的に世間でイメージされている福祉と美容とを組み合わせたときの効果を探る先駆的なものである。

次に主体性の醸成については、同じイベント参加者を対象として、こういった「気づき」を通じて主体性が醸成されたかを同様に当事者の語りから検証することにする。なお、この事例は筆者自身が企画・立案・実施・検証に一貫してかわる当事者グループの活動であり、今後の実践にフィードバックしてゆく途が開かれている。

II 調査概要

1 調査対象

今回、対象としたイベントを主催するF団体は、2012（平成24）年12月に、福祉従事者として現場経験を10年以上有する5名が、秋田市を活動拠点の中心として設立した任意団体である。

代表を務める筆者らの目標は、周囲の福祉に対するイメージを転換することと福祉にかかわる地域活動の主体を育てることであった。とりわけ、福祉従事者が抱える「自身に対する評価と成果の見えにくさ」を互いに共有できる「場づくり」が、それらの目標の第一歩だと考え、実践することとした。なぜなら「評価の見えにくさ」、「成果の感じられにくさ」が福祉の実務に対するイメージの悪化につながり、従事者のモラルの低下や離職の増加、さらには社会一般の福祉実務に対する忌避、関心の一層の低下をもたらしていると、それぞれの現場の実感として感じられていたためである。

「場づくり」にあたっては、福祉従事者の悩みを共有しつつ、社会一般の福祉に対する関心が薄い人々も参加しやすいことも、あわせて目指した。そこで、通常は福祉とつながりの薄いと思われる異分野－本報告で取り上げる「美容」など－と福祉を融合させるイベントをさまざまなテーマで重ねてきている。

なお、設立当初より活動を共に行いたいと希望する者が集まっており、それぞれの希望する内容にあわせ、現在ではいくつかのプロジェクトに分かれて継続している。さらに、F団体から独立し、新たに地域で活動を行う者も見られ始め、地域での主体的活動を促すインキュベートの役割も果たしつつある。

2 調査方法

今回、取り上げるイベントでは、まず障害者2名を含めたモデル5名を美容師がメイクしたファッションショーが行われた。小さなランウェイを準備し、メイクと衣装を参加者全員で楽しんだ。さらに、参加者同士のコミュニケーションを促すため、飲食可能な環境で福祉をテーマにワールドカフェを展開した。ワールドカフェとは多様な参加者の集合知を引き出す手法である。カフェのようなリラックスした小グループ（4～5名）の話し合いにて、ファシリテータを交えて行い、時間が来たら別のファシリテータのテーブルに移動する。移動先では、その前に話し合われた内容を緩やかに引継ぎながら、あらためて議論を展開させる。今回の場合、15分を1区切りとして、参加者は3人の別々のファシリテータのもとで議論を紡いでいった。

このイベントでは熊谷（2015）で明らかにしたように参加者の6割で福祉イメージが向上し、さらに、そのうち8割が今後、地域活動を希望するという効果を挙げていた。そこで本稿では、どのようにして、そうした福祉イメージのポジティブな変化や主体性の醸成が生まれたのか、両者の相互関係はどのようなものなのかを明らかにすべく、参加者に対する追跡インタビュー（半構造化法）調査を実施した。

調査は平成27年1月31日から2月8日にかけて秋田市等で行い、参加者のうち調査に同意した3名（男性2名、女性1名）¹⁵⁾の協力を得た。年齢は30代2名、40代1名、職業は福祉従事者（生活相談員）1名、非福祉系会社役員（代表取締役）1名、非福祉系NPO法人役員（理事）1名であり、それぞれの属性を整理すると以下の表1のようになる。

表1 インタビュー対象者の属性

	性別	年齢	職業
A氏	男性	30代	福祉従事者（生活相談員）
B氏	男性	40代	非福祉系会社（役員）
C氏	女性	30代	非福祉系NPO法人（役員）

Ⅲ 結果

以下ではまず、福祉イメージの向上の要因と主体性が生まれるきっかけ（気づき）について3者の語りを整理する。

1 福祉イメージ向上の要因

第1に福祉イメージのポジティブな変化の要因に関する語りの要点を整理すると表2のようになる。例えば、A氏は次のように語っていた。

自分達が思う福祉のイメージが外部の情報で構成されている面が強かったということではないかと思う。例えば、給料が安い、きつい、大変というイメージに対して、このイベントは人々を喜ばせる、人を生き生きとさせてくれるイベントであった。世間一般的に考えられている福祉とは違い、福祉に対するやりがいや明るさという点も認知されたことがイメージの変化につながったのではないか。

つまり、A氏にとって福祉イメージ向上の要因は、イベントにおける福祉のポジティブな側面、人々を喜ばせる面の提示にあったことがわかる。同時にA氏が、外部すなわち「世間」において、「給料が安い・きつい・大変」というネガティブなイメージが流布していることに注意を促している点も留意すべきであろう。

これに対しB氏の語りでは、以下のくだりが注目される。

福祉や介護というのは美容とあまり関係なさそうに捉えられると思う。関係のない、つながりの無いような分野と一緒にいったイベントだからではないか。福祉というとそれこそ「公共財」（ママ）のように捉えられていて、仕組みや形態もそのようになっているなかで、やはり最低限のものを提供するという方向性を持っていると考えられる。その最低限の方向性と美容というのは真逆な印象を受け、言ってみれば水と油の関係性のように感じながらも、福祉にも美容が関わっているという新しい組合せの提示の結果ではないか。

B氏がここで語っているのは、福祉にも一般に考えられているのとは異なり、「最低限のものを提供するにとどまらない」美容に見られる方向性が潜在することに、イベントを通じて気づかされたということである。美容では、ここまですれば十分だという客観的な基準が予め与えられているわけではない。B氏は今回のイベントを通じて、福祉にもそうした美容にも共通する点があることに気づかされたというのである。

つまり、B氏もA氏と同様に、「世間」における福祉に対するネガティブなイメージが確認されている。それは、美容における選択可能性について新たに認識されたことにほかならない。

さらにC氏は次のように語っていた。

あのイベントは理解しやすかった。高齢の方などに普段、自分がやっているネイルアートとか、アロマセラピーとか、自分の持っている趣味とか、好きなことで自分にもできるかもしれない等、自分が関心のある美容部分に置き換えるというか、こういう関わりが自分なら出来るかもしれないという面で持ち帰りやすかった。自分が好きなことで、女性なども関わり易い「美容」という点、テーマがわかりやすかったこと、それぞれが自分のことに変換が出来るという形のイベントであったからではないか。

C氏の語りからは「イベント内容・テーマの理解のしやすさから、自分のこととしての持ち帰りやすさ、自分の興味関心のある分野への置き換えやすさ」が要点として挙げられ、イベントにおいては単純にポジティブなイメージが提示されるだけでなく、理解しやすく、自身の体験に引き付けられること（「自己体験化」）が重要であることが理解できる。

表2 福祉イメージのポジティブな変化の要因

	語りの要点	変化の要因
A氏	「世間」でのネガティブなイメージが、イベントでの福祉のポジティブな側面（人びとを喜ばせる・人を生き生きさせる）の提示によって転換した。	イベントでのポジティブなイメージの提示
B氏	最低限の提供にとどまるという「世間」のイメージが、それにとどまらない美容とも共通点があることの気づきによって転換した。	ポジティブイメージをもつ異分野との共通性に対する気づき
C氏	イベント内容・テーマの理解のしやすさから、自分のこととしての持ち帰りやすさ、自分の興味関心のある分野に置き換えやすさが生まれた。	理解しやすさから生まれる自己体験化

2 主体性を生む気づき

第2にそれぞれの主体性を生む気づきをめぐる語りは表3のように整理される。まず、A氏は以下のように語っていた。

イベントに参加して、見ていただけだと自主的な行動を起こそうとはあまり思わないが、福祉関係者や他職種の人々が集まり、話し合っ、福祉の実際を理解できること、楽しい部分を表現できる機会を設け、見て、聞くこと、そこに参加する人々が福祉の内面に触れ合うことで、もっと自由に表現しても良いという意識が芽生え、自分にも何かできるのではないかという気持ちにさせられたのだろう。

ここでA氏は主体性を生む気づきについて、①福祉業界の内外の人々が集まり、②福祉の内面に触れ合うことで、③これまでのイメージに囚われない自由な取組みができるという実感が生まれた、と

いう一連の過程を指摘している。つまり福祉業界の内外との交流により、福祉従事者であるからこそ抱くネガティブなイメージは、福祉の本質とでも言うべき、ポジティブなイメージに触れることで転換し、自由な取組みが可能であるとしている。ここで、A氏のいう「福祉の内面」とは、先に「福祉に対するやりがいや明るさ」について、「人々を喜ばせる、人々を生き生きとさせてくれる」と語っていたことから、「人間関係」がその根底にあるとうかがえる。したがって、A氏の指摘する主体性を生む気づきは、①から③まで一貫して「福祉における人間関係の重要性」に関わっていると言えよう。一方、B氏は以下のように語っていた。

やはり、福祉とは人との支え合いみたいな部分があって本質的に魅力があり、素晴らしい。その部分に気づけば本質的に良いものは良いという部分はある、福祉に対しても、イベントを実施された団体に対しても「公共財」（ママ）と認識しているなかで、その素晴らしさに気づけば私もやってみたいという気持ちになる。今まで、この社会を作ってくれた高齢者のためになんとかしたい、してあげたいという気持ちというのは必ず、誰の心の奥にもあり、その部分を今回のイベントが刺激したのではないかな。

つまり、B氏もまたA氏と同様に、主体性を生む気づきの核心に「福祉の人と人との支え合いという本質的な魅力への気づき」があったと指摘している。それは同時に、「誰の心の奥にも」普遍的に存在するはずの支え合いの意識であり、だからこそ主体性を生み出す力を持っていたとB氏は言うのである。

これに対しC氏が語るのとは以下の事柄であった。

テーマと内容のトータルバランスがすごく良かった。障害のある方も一緒に参加する内容で、ファッションショーに精神障害者の方も登場し、内容の幅が広がった。色々なところに自分の気持ちを置くことができ、共感できるポイントがかなり多かった。一方的なものではなく、さまざまな立場に視点を置くことが出来た。

C氏がここで主体性を生む気づきとして語っているのは、「自分の気持ちを置く（「感情移入」）」ことや「共感」だが、それはA氏やB氏のように福祉の特定の本質ではない。むしろC氏が指摘するのは、福祉への「共感」のポイントは参加者によって多様であり、そうした多様なポイントがこのイベントで準備されていたことの重要性である。

表3 主体性を生む気づき

対象者	語りの要点	主体性を生む気づき
A氏	福祉業界の内外の人が集まり、福祉の内面に触れ合うことで、これまでのイメージに囚われない自由な取組みができるという実感が生まれた。	福祉における人間関係の重要性
B氏	福祉の人との支え合いという本質的な魅力への気づきや誰の心の奥にもある支え合いの意識が刺激された。	福祉の本質にあり、誰もが持つ支え合いの意識
C氏	テーマと内容のバランス。 内容の多彩性が個人の気持ちの置き場を広げた。 共感できるポイントの多さ。	福祉の多様性

以上の語りからうかがえる「福祉イメージの向上の要因」と「主体性を生む気づき」の関係を整理すると、まずA、B氏とC氏とで大きく2つに分かれている。A、B氏においては、福祉イメージの向上が、福祉の本質的な魅力への気づきによって促され、かつ、その本質的な魅力、すなわち「人々

を喜ばせること」や「人と人との支え合い」への気づきが主体性を生む契機にもなっていたと考えられている。

これに対しC氏では、福祉イメージの向上の要因は参加者それぞれの「自己体験化」であるとされ、したがって主体性もまた「福祉に対する多様な共感」から生まれたとしている。

ここでまず確認すべきことは、従来、独立的に捉えられていた「福祉イメージの向上」と「主体性を生む気づき」とが密接に関連している可能性があることである。この点は、現在の福祉の現場が直面している2つの大きな課題が、別々にではなく一貫した配慮や戦略を通じて解決しうる可能性を示唆しているという意味で重要な発見である。そのうえで、C氏の語りからうかがえるように、これまで福祉に対する世間のイメージはネガティブなものだと考えられていたが、それだけでなく「イメージすらない」、つまり福祉に対する無関心が広がっている可能性がある。この点も、福祉イメージの転換を目指す際の前提にかかわるものであり、無視できない知見だと言えよう。

3 福祉イメージの内実

そこで、そもそも福祉に抱いているそれぞれのイメージについて3氏の語りを整理してみる。まずA氏は次のように語っていた。

福祉従事者として福祉のイメージについては暗いと感じている。私は今、福祉現場で働いているが、様々な状況のなか、正直なところ、このまま福祉関係で働いていてもどうなのか、良いのかと思い始めている。福祉に対するポジティブなイメージとともに、今後の不安、ネガティブなイメージも感じている。福祉業界にいるからこそ、固執した考えとなり、諦めにも似たような感じではないか。

福祉従事者であるA氏は、彼のいう「人々を生き生きとさせる」というような福祉のポジティブな側面と同時に、世間の抱く「給料が安い・汚い・きつい」といったネガティブなイメージも福祉に従事しているからこそ実感し、かつそれがどんどん強まることに諦めざるをえなくなっていると指摘している。ここで注意すべきは、福祉に対するネガティブなイメージが、単に世間のものであるのではなく福祉に直接従事する人びとの間で、福祉に従事すること自体によって強化される可能性が示唆されていることである。

これに対し、福祉従事者ではないB氏は以下のように語っている。

福祉の人たちは、清く、貧しいという清貧のイメージがあり、福祉の方と話す場面があると、なんとなく独特の雰囲気を感じる。福祉・介護業界で働く人びとの独特の雰囲気があり、その雰囲気を私が一言でいうと、清貧のイメージである。清貧の中でも派手な方もいて、福祉・介護業界の中でも価値観や想いという面で二極化しているのだろうか。

ここでB氏が指摘する福祉従事者に対する「清貧」というイメージは、福祉従事者という固定化された「給料が安い、きつい、大変」といった印象が従事者自身の貧しく生活が質素であるというイメージに直結しうることを指している。これは、A氏が語る「福祉のポジティブな側面も理解しつつ、直接従事するがゆえにネガティブなイメージも実感し、かつそれが強まることに諦めを抱いている」従事者の姿とよく重なる。

同時にB氏は「清貧の中でも派手な福祉従事者がいる」ことにも気づいている。清貧の中に存在する「派手」とは、従来の「給料が安い、きつい、大変」という福祉従事者へのイメージから、かけ離れた容姿を指している。B氏のこの指摘は、世間が抱く福祉に対するネガティブなイメージに回収されない従事者の存在にも注意を払う必要が示唆されている。

これに対しC氏は福祉に対するイメージについて以下のように語っていた。

一昔前であれば、施設に追いやる、施設にやったの、というネガティブな感じであったのが、今は施設に行くという選択肢が、タブーではないというのはすごく思う。イベントへの参加をきっかけに、福祉＝タブーとを感じる点が薄れ、自分の事もっとオープンに話をしていこうと感じた。福祉に対するイメージという壁はイベントに参加することによって無くなったように感じる。具体的には、皆が通る道というように思えた。これまで福祉という2文字がどこか遠い、関係のない部分という点があり、自分では思っていなかったはずであったが、誰にでも関係のあることと感じた。

ここでC氏は2つのことを語っている。1つは、福祉に対するネガティブなイメージが「施設に追いやる」ということに起因しており、さらにそれが福祉に対するタブー意識を生んでいるということである。もう1つは、そうしたタブー意識とも関わって、ごく限られた人しか福祉に対する関心が抱かれなくなっているということである。C氏の指摘は、A、B氏のそれが福祉従事者に関わるものだったのに対し、「施設に追いやる」側、つまり福祉を間接的に利用する側に立った福祉イメージである。A、B氏は従事者の側でも福祉に従事すること自体によって世間のイメージが内面化される点を指摘していた。これに対し、C氏は福祉を利用する側も「施設に追いやる」こと、すなわち福祉を間接的に利用すること自体によってネガティブなイメージが定着することを指摘している。さらに、そうしたイメージの定着を通じてタブー意識というイメージを抱くことそのものの稀薄化、無関心化が生み出されているとC氏は示唆するのである。

表4 福祉イメージの内実

	語りの要点	イメージの内実
A氏	福祉のポジティブな側面も理解しつつ、直接従事するがゆえにネガティブなイメージも実感し、かつそれが強まることに諦めを抱いている。	福祉従事者による世間のイメージの内面化
B氏	福祉従事者一般に清貧な雰囲気が見られる一方、それに回収できない「派手」な従事者もいる。	世間のイメージに回収されない従事者の存在
C氏	施設に追いやるというネガティブなイメージが福祉に対するタブー意識を生んでおり、誰もが関係するという当事者意識の醸成が重要である。	福祉を利用することのタブー意識

以上の語りを整理すると表4のようになる。A、B氏の指摘からは、世間が一方的に福祉に対してネガティブなイメージを抱いているというよりも、福祉に従事すること自体によって、そうしたネガティブなイメージが内面化し、本来気づいていたはずの福祉のポジティブな側面が見失われがちになっている現実がうかがい知れよう。つまり、ここでは、従来、福祉のネガティブなイメージが世間のイメージにより、定着しているということとは視点が違い、福祉従事者であるが故のネガティブさが存在していることが考えられる。これに対し、C氏が語る世間のイメージは、A、B氏が語る「福祉に従事すること」ではなく「福祉を間接的に利用すること」に対するものである。「福祉を間接的に利用すること」においては、A、B氏が指摘していたような「本来のポジティブさ」を見出す余地がなく、だからこそタブー意識、すなわちネガティブなイメージを抱くことから一歩進んだ無関心が生まれるのだと言えよう。つまり、ここでは、「福祉に従事すること」と「福祉を間接的に利用すること」の立場の違いにより、当然に福祉のイメージの捉え方の違いが見られる。「福祉に従事すること」の立場から考えた場合、外部及び内部の双方による福祉のネガティブなイメージの発信が、より福祉に従事することによるネガティブさを強調することになっている可能性が見られ、「福祉を間接的に

利用すること」の立場から捉えた場合、外部及び内部の双方による福祉のネガティブなイメージは浸透する前に、タブー意識の強調により興味関心の無さが強調される構図を読み取ることが可能である。さらに、C氏においては福祉イメージの向上や主体性につながる契機が、ここで語られている「誰にでも関係のあることとを感じる」当事者意識の醸成に求められるのである。

IV 考察

1 福祉イメージの内実によって異なる主体性醸成のメカニズム

以下では、これまでに整理した各論点が相互にどのように関連するのかについて検討する（表5参照）。

表5 福祉イメージの向上と主体性の醸成の関連

	職業	イメージの内実	ポジティブな変化の要因	主体性を生む気づき
A氏	福祉従事者 (生活相談員)	従事者による世間のイメージの内面化	イベントでのポジティブなイメージの提示	福祉における人間関係の重要性
B氏	非福祉系会社 役員	世間のイメージに回収されない従事者	ポジティブイメージを持つ異分野との共通性への気づき	福祉の本質にあり、誰もがもつ支え合い意識
C氏	非福祉系 NPO 法人役員	福祉利用のタブー意識	理解しやすさから生まれる自己体験化	福祉の多様性

まず、当初は「福祉イメージの向上」の要因として世間のネガティブなイメージの転換に注目していたが、今回の調査により再検討が迫られた。第1に、もともと福祉に抱かれているイメージが「従事する福祉」と「(間接的に) 利用する福祉¹⁶⁾」によって大きく異なっていた。「従事する福祉」については、たしかに世間のネガティブなイメージが従事者にも内面化されていたが、「利用する福祉」のイメージはネガティブである以上にタブーと見なされ関心が向けられていない可能性があることが示唆された。さらに第2に「従事する福祉」についても、世間のネガティブなイメージの内面化が、世間のイメージであるから起きるというより、現在の福祉の現場がそうしたイメージに近い構図を持っており、従事すればするほどそうしたイメージから逃れがなくなり、諦めすら抱かれていることもうかがい知れた。

次に、「福祉イメージの向上の要因」と「主体性を生む気づき」の関連は当初、想定されていなかったが、今回の調査を通じてそれらは相互に密接に連動していることが明らかになった。「従事する福祉」をめぐるイメージの向上の鍵は、「人々を喜ばせること」や「人と人との支え合い」という福祉のポジティブな魅力の再認識に求められており、その魅力は誰もが共感できるものとも考えられているがゆえに、主体性を生むきっかけにもなりえると見なされていた。

これまでは福祉をめぐる「主体性」に関しては、「自己充足」と「繋合希求」とが相乗的に成熟する過程が構想されていた。これに対し今回の調査では、A氏が指摘する「人々を喜ばせる」すなわち「利他意識」とB氏の言う「人と人との支え合い」すなわち「相互扶助意識」が、福祉の本質的な魅力として実感されており、それらへの気づきが主体性を生むと考えられていた。これらの意識はそれぞれに「自己充足」と「繋合希求」に重なっており、今回のケーススタディがこれまで蓄積されてきた福祉論と接続する一般性を持ちえている点を示唆している。しかも、福祉の本質的な魅力の再認識が主体性の醸成に接続する論理を示している点で注意すべきである。

一方、「利用する福祉」については、従来の主体性の成熟に関する議論とは当然ながら合わない。

そこでのイメージ転換の要因は、「理解しやすさから生まれる自己体験化」に求められ、だからこそ主体性を生むきっかけも「福祉の多様性」への気づきだと考えられているのである。

2 今後の地域活動に求められる戦略

このように焦点となる福祉が「従事するもの」なのか「利用するもの」なのかの違いは、これから求められる地域活動のあり方に関する展望の相違にも影響している。例えば、B氏はそれらについて次のように語っていた。

魅力を伝えることが重要。やはり、もともと人の支え合い的な部分が福祉にあると意識する。人として本来あるべき、誰かのためになんとかしたい、してあげたい、という部分にアプローチする内容を重視していくべきなのだろうと思う。

これに対しC氏が語るのは、そうした「支え合いの魅力」を全面に押し出すこと以上に、主催者自身の喜びや楽しさが参加者に伝わることの重要性である。

主催されたメンバーの方々と話したとき、メンバーの方々がすごく楽しそうにというか、今までこういうのはなく、仕事を越えた人との出会い、自分達が仕掛ける側というか、そういうことがすごく楽しいということを何度も聞いた。その場を作ること自体に喜びを感じている。そこに意味があったように感じる。メンバーの方々が輝ける場であったり、活躍できる場であったり、普段の仕事ではない部分の能力を発揮したり、主催団体であるFが無くなると今まで関わってきた皆さんがひとつ場所を失うように感じる。

たしかにB氏の言うような福祉における「支え合いの魅力」は「従事する」立場にならなければ共感しえない面もある。「利用する」立場から出発すると、福祉そのものの魅力以前に福祉に関わることの魅力が、C氏の指摘する「楽しさ」「喜び」といった点で共有される必要がある。この点については、従事者の一人であるA氏も以下に語るように気づいていた。

福祉というものを前面に出したイベントは、一般の人々が参加するのに気が引けるのではないかと思う。様々な人々が集まるきっかけ作りとして、福祉イベントが存在するようになればよいと思う。さらに、そこでであった人々が個々につながりを持ち、イベント自体を地域が認知しているという状況を作り出す必要はある。その中で、福祉従事者がいて、他職種がいて、若者がいて、その環境に入り込むことで、自然と会話が弾み、福祉現場や福祉の事実を見聞きし、福祉の理解が促進され、相談や助言が行われるような形になればよいのではないか。

このようにA氏が指摘するのは、彼がB氏と異なり、福祉に直接従事しているからだと言えよう。つまり、A氏が直面する福祉の現場は、B氏がイメージする「支え合い」とはほど遠く、むしろC氏が言うような「利用し利用される」状況に近い。そこには、世間が抱く「従事するイメージ」が裏切られるどころか裏付けられる厳しさが横たわっている。そうした現実をA氏が直視しているがゆえに、従事者でさえ、あるいは従事者だからこそ見失いがちな福祉のもう1つの原点、すなわち「相互扶助」ではなく「利他」への気づきを、あえて従事者以外との交流に見出しているのだと考えられる。

ここでのA氏の指摘は、単なる福祉の本質論以上の含意をもつ。なぜなら、その指摘は福祉の現場の厳しさを直視することから出発しており、その厳しい現実そのものを乗り越える方向性を示唆するものだからである。福祉が「利他」であることに気づくことにより、そこでの福祉は単なる厳しいものから別の意味を持つようになる。だからと言って、現実の待遇改善が閑却されてよいわけではな

い。ただA氏の指摘からうかがえるのは、そうした改善も、福祉が「利他」であることが気づかれな
いままに進めば、現場の欠乏感が癒されないままに終わる可能性である。

今後、福祉に対するイメージの転換と主体性の醸成をともに図っていくとする地域活動において
は、「利用し利用される福祉」という現実が厳然と横たわることを踏まえ、単に「相互扶助」だけで
はなく「利他」への気づきを促すような方策が求められよう。それは「相互扶助」への気づきを促す
以上に困難な方策かも知れない。しかし、A氏が「従事者と非従事者の交流」に、またC氏が「自己
体験化」に可能性を見出していたように、従来の福祉の枠組みから離れ「利用者」の視点に立つとき
自ら取るべき戦略が絞り込まれてくると言えよう。

その戦略において注意すべきは、もはや目標は単なる福祉に対する「イメージ」の転換ではなく、
少なくともそこに関わる者にとっての福祉の「内実」そのものの転換だという点である。「相互扶助」
さらには「利他」への気づきは、そのような目標の本質的な展開を保障する指標として欠かしえない
視点に他ならない。こうして引き出された一連の方向性を実践を通じて検証し、幅広い立場で共有で
きるよう彫琢することが次なる課題である。

謝辞

本研究を行うに当たり、研究にご協力頂きました皆様に心からお礼を申し上げます。

註

- 1) 堀田和司・奥野純子・戸村成男：「介護老人保健施設に勤務する介護職員の「仕事へのモチベーション」を促進する要因」、『日本公衆衛生雑誌』56(12) pp.863-874, 2009年。
- 2) 山田宗寛：「福祉専門職におけるキャリアプランとライフプランのイメージに関する一考察—佛教大学生に対するアンケートから—」、『福祉教育開発センター紀要』11, pp.109-119, 2014年。
- 3) 迫井正深：「地域包括ケアシステムの構築に向けた課題—2030年以降の社会変革を見据えて—」、『厚生労働省老健局老人保健課（医療と社会）』vol.24(4) pp.339-356, 2014年。
- 4) 藤松素子：「地域福祉をめぐる論点と課題—地域福祉の成立要件とは何か—」、『佛教大学社会福祉学部論集』8, pp.39-56, 2012年。
- 5) 小谷良子・中道實：「地域社会活動団体における中枢活動層の地域感情と地域参画への主体要因」、『奈良女子大学大学院人間文化研究科、コミュニティ政策』vol.2 pp.149-172, 2004年。
- 6) 上田恵津子：「日本人の自己形成と世間」、『大阪大学教育学年報』1, pp.39-48, 1996年。
- 7) 藤井貴之・亀島信也・高岸治人：「集団との関係とネガティブな感情表出との関係—最後通告ゲームを用いた実験—」、『関西福祉科学大学紀要』14 pp.151-157, 2010年。
- 8) 寺田恭子・原博美・福田留美・藤本聖子：「子育て支援活動に取り組む親の主体性に関する研究—個と関係性に着目して—」、『プール学院大学研究紀要』, 第55号 pp.91-105, 2014年。
- 9) 鯨岡峻：『ひとつひとつをわかるといふこと—主観性と相互主体性—』ミネルヴァ書房2006。
- 10) 野口栄子：「福祉における人間の主体性の問題」、『京都府立大学学術報告（理学・生活科学・福祉学）』第19号C系列 pp.77-81, 1968年。
- 11) 林真帆：「ソーシャルワークにおける「主体性」に関する一考察—主体性概念に着目して—」、『別府大学紀要』52 pp.55-65, 2011年。
- 12) 谷口功：「コミュニティにおける主体形成に関する一考察」、『コミュニティ政策学会コミュニティ政策』2(0) pp.173-189, 2004年。
- 13) 谷口敏代：「福祉の側面からみた訪問美容サービスの効果と今後の展望」、『岡山県立大学短期大学部研究紀要』, 8, 33-43, 2001年。
- 14) 原千恵子・平尾良雄・佐野恒夫・秋元弘子・粉川亮・奥山一成：「美容と福祉の融合—調査による現状分析—」、『山野研究紀要』, 11, 65-71, 2003年。
- 15) イベント参加者40名には事前に氏名、住所、連絡先記入を依頼し、うち記入された12名にインタビュー調査を依頼、承諾を得た3名に対し調査を行った。調査では、事前に質問票を配布、面接し会話を録音、録音後、逐語記録にて面接内容を全て把握し、内容の事後分析を実施した。
- 16) ここでいう「(間接的に) 利用する福祉」とは、サービスを実際に利用する本人ではなく、福祉サービスの利用を促すあるいは提案する家族側あるいは近親者側を指している。